
Game

ryoku

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Game

【Nコード】

N9305N

【作者名】

ryoku

【あらすじ】

最近噂になっているゲームソフトがある。

『天地開闢』tentikaibyaku

それをプレーすると意識不明や失踪する曰くつきのもの。

俺達は偶然それを手に入れ、プレーすることになった。

そこで俺達が見た世界は全く違うものになっていた・・・。

崩壊した街

ビルは崩れ、ガラスは割れ落ち、道路には壊れた車や傾いた信号機が並ぶ。

空は雲が覆い薄暗く、くすぶる火とあっちこちに煙が見える・・・

何かが焼けた嫌な臭いに鈍かった感覚と思考が動き出す。

「手を挙げろ！！」

急に背後から声が聞こえ、振り向く暇もなく背中に何かが当たる。それが刃物かなんだろうかと予想は付いたが、ビルの合間から銃を持った人間が現れきつと自分に向けられたものも銃だということが解った。

「動くな、何者だ！？」

「・・・えっと」

誰もいないと思っていたのに、急に目の前に現れて、それで自分に銃を向けてる。その状況が飲み込めず・・・

「早く答えろ！！」

つと言われても・・・確か・・・名前・・・あれ？

「・・・もしかして！陽か！？」

呼ばれて俺は自分が陽と言う名だったのを思い出す。混乱していたと言えばそうなのだが、本当に呼ばれるまで自分の名前など綺麗に忘れていた。

「お前、陽だろ！？」

銃を向けていた人の向こうから1人の学生服を着た自分と同じ位の男が出てきた。

「お前も生きてたんだな？俺だよ！篠本貴一！！」

「貴一？」

声に出して読んでみると、確かに知っている・・・気がする。

「やっぱり陽じゃん！」

貴一は嬉しそうに俺に飛びついて来た。その瞬間、大量の記憶がよみがえる。

さやのちとぎいち
篠本貴一は、同じ高校のクラスメイト。眼鏡に少しぼさぼさで伸びた茶髪姿にパソコンオタクの・・・。

かななぎよう
そして俺は神無陽東京の高校に通う普通の・・・生徒だったはず・・・。

「篠本、知り合いか？」

「友達です！それにしても何処にいたんだ？この三ヶ月間も・・・」

「・・・三ヶ月間って？それに何でこんな事になってるんだ？」

俺がそう言うのと貴一と他の人が怪訝そうに顔を見合わせる。後で貴一が話してくれた内容に俺はただ驚くだけだった。

「東京は今から三ヶ月も前に崩壊したんだ、一瞬の光で・・・この街から他の街へは交通機関が壊れて状況は不明・・・とにかく運良く生き残った人達がグループを作って生活してて・・・」

何かの漫画の話みたいだが頬をひねってみても痛覚はあり、現実なんだと思うのにどこかまだ夢を見ているような感じで・・・。

とりあえずは貴一の知り合いと言う事で、簡単な身体検査をした後に案内されたのは元は大きなビルだったらしい建物の地下だった。地下は住居スペースに作りかえられたのかいくつもの部屋があり、あっちこっちに人の気配がする。

しばらくして通されたのはコンクリートむき出しの広い部屋。

「貴一さっき言ってた、一瞬の光って爆弾とか？」

「核か・・・俺も最初は思ったけど、核とか落ちれば一体灰だろ？それに戦闘機みたいなものがあるわけじゃないし・・・あのGameが原因じゃないかって俺は思うんだ」

「Game?」

「ほら、俺達がしてた『天地開闢』^{てんちかいびやく}って言うっても俺の考えだけど・それにしても、どうやって生き残ったんだ?」

「え?」

「俺も気が付いたら倒れてて、東京はあんなになってるし人もいないし・・めっちゃめっちゃパニックだったけど、ここの人達に見つけてもらって良かったよ」

「俺は目覚めたらあそこにて・・・」

「目覚めたらって・・まさか、さっき!」?

「そうだけど・・・」

「こんなに時間よりのズレってあるものなのか・・?」

貴一は目覚めて三ヶ月も経っていて、他の人も前後一ヶ月程度はあるものの大体同じ時期に目覚めたらしい。俺みたいなのは初めてらしく・・でも俺にはどうして目覚め時期が違う理由なんて分かる訳が無い。

俺達の隣でいつの間にか話を聞いていた男が口を挟んできた。

「陽、この人はこのリーダーの須賀^{すが}さん」

「はじめまして、神無君? だっけ?」

「・・神無・・陽です」

須賀と紹介された男は、引き締まった体つきで二十代後半位の青年だった。銃を持つ姿も様になっていて無意識にじっと見ていると元自衛隊で働いていたと簡単に説明してくれた。自衛隊員なら銃の扱いは俺達なんかより慣れていても当然なんだろう・・。

「それで・・三ヶ月の間の記憶は無いのか?」

「光を見て気がつくって真っ白な場所に居て、次に目を覚ますとここにいたんです・・」

「「真っ白い場所?」」

貴一と須賀さん2人が聞いてくる。って聞き返されても返答に困ってしまう。

「・・・俺もただそんな場所にいたようなと思うだけで・・」

「そうか・・・まあ君は他のグループに属しているわけでもなさそうだし、今日はここでゆっくりしていくといい」

須賀はしばらく黙っていたが、表情も変えずに一言言って去っていった。

広い部屋を出るとさっきまで気配だけだった場所に人の姿があった。けれどみな焦心してるかのようで、学生服の者や、スーツ姿のサラリーマン、また主婦らしいおばさんまでいるが服は汚れ疲れたように冷たい床に腰を下ろしたり、寝そべったりしている。

横を歩く自分に向けられる視線もどこか冷ややかで・・・

今夜は喜一が寝ている部屋を借りて休む事にした。何人かと同じ部屋なのだろうが、みな下を向き明るく喋れるような雰囲気ではなかった。

崩壊した街は静かで、夜になると文字通り闇夜、雲間から覗く月の光がこんなにも明るいななんて以前は気づかなかった・・・

「他の皆はどうしてるか知ってるか？」

少し頭がスッキリしてくると記憶がよみがえる・・・あの時、俺達は学校にいた・・・放課後だったけど他の生徒もまだ居たはずだ。

「俺は正確には学校で目を覚ましたんだけど、何人かはいたよ・・・途中までは一緒にいたりもしたけど結局はバラバラになって・・・あいつらはいなかったな・・・」

「そうか・・・」

「さっ早く寝よ、明日も早くから移動だし」

そう言うとき貴一は支給されボロボロの毛布に包まると、すぐに寝息が聞こえ始めた。

俺は深い溜息をついて、貴一の隣に寝転がり貸してもらった毛布を一枚被って眠りについた。

けれど俺は不思議な夢を見る事となる・・・。

>
>
>
N
e
x
t

世界の変化

ポチャン・・・ポチャン・・・。

水が落ちる音が聞こえる・・・それに・・・またあの時のように自分の体が無くなったかのような感覚。

けれど不思議なことに視界だけは自由に動かすことができた。

音がする方へ視線を向けるとぼんやりと青い光が見え、更に目を凝らすと1人の女がうずくまっているのが見えた。

『女?・・・誰だ?ここで何をしてる?』

声には出せなかったが、頭の中でそう女に投げ掛けると女はこちらを向いたような気がした。

『助けて・・・お願い・・・て・・・』

女もまた声には出さなかったが、脳に直接聞かせるように小さくてもはつきり聞こえた。

『助けるって?君は何者なんだ?』

再びそう投げ掛けると今度は女の体が動いたのが解った。ずるずると這うような動きで近づいてきた女はびしょ濡れの黒い着物を着て、長い黒髪もぐっしりと濡れている。

顔は青白く表情までは解らないが、切なげに涙を流す姿は自分と同じ位の年の少女に見えた。

『早く・・・間に・・・合わない・・・』

こちらへ向かって手を伸ばすがある地点からこちらには来れないのか、動きが止まった。

『今なら・・・力を・・・助けて!!』

「・・・おい!・・・おい陽!」

「え・・・?」

「何だよ・・・寝ぼけてんのか?もう朝だぞ」

「・・・貴一」

周りを見わたせば、ガラスの無い窓からは太陽の光が差し込んでいる。手には毛布を持ち、ここは壊れたビルの一室・・・。

「・・・夢?」

「どうした?」

「いや、何でも・・・」

「?? まっ早く仕度して行くぞ」

「何処に?」

「本拠に戻るんだ、一応食料も手に入れたしひとまずな」

出発をしたが通る道は表の道路では無く、ビルの地下に張り巡らされた下水道や地下鉄の道を通る。

どうして表を歩かないんだ?・・・その俺の疑問はすぐに解けた・・・一つの爆発音によって・・・。

「陽、こっち!」

爆発音で周りが慌しくなり、貴一に引っ張られ一先ず瓦礫の影に隠れた。

「何が起きたんだ?」

「しっ! 敵が来たんだよ・・・」

声を潜めて貴一が怯えた顔で言う。

「敵?」

確かに少し離れた所から、よくTVで聞いていた銃の音が聞こえる。

でも実際、銃が打たれる所なんて見たことがないから実感はわいてこない。けれど、向こうからは銃撃音の他に・・・獣の様な声・・・それと・・・

「おっおい・・・陽！」

「今、子供の声が聞こえなかったか？」

「子供の声？そんなの・・・別に」

耳を澄ますと確かに小さな声が聞こえ、俺はそっと脚を向ける。俺がどんどん進んで行くため、しばらく躊躇ったが、貴一も後を着いてきた。

「・・・いた」

瓦礫の中に埋もれるように幼い少女が泣いている。

「いたって・・・陽！？」

俺は少女へ近寄り、どうした？と聞くが少女はただ泣いているだけで答えない。

「迷子になったのか？何で泣いてる？」

何度かそんな質問をすると、少女は泣くのをピタッとやめた。泣き止んだことにほっとしたが、ゆっくりとこっちへ顔を上げた少女の顔を見た瞬間、俺は固まってしまった。

何故なら少女の顔は、死人の様に瞳は瞳孔が開き、肌は青白く口元は血で汚れている。

『ねえお兄ちゃんも一緒に行こう』

笑顔を作っているつもりなのか、少女の声は明るい。けれど、少女の顔はただ口角を無理に上げた歪んだ表情が更に不気味さを上げる。

『1人じゃ寂しいでしょ・・・だから私と一緒にしよう・・・』

一緒に行こうと言う言葉を少女は死人の顔のまま何度も言う、何かにすがりつくような声音で・・・

俺が思わず後ろに一步下がった時、少女の瞳孔の開いた目がぎょろりと動き、表情が変わる。

『何処に行くの？お兄ちゃんも私を・・・殺すの？』

少女はゆつくりと這う様な姿で近付いて、そして俺の体を恐ろしい力で掴む。

『ねえ・・・一緒に・・・』

「陽！早くこっちに！！」

『お兄ちゃん・・・』

後ろで貴一が叫ぶ声も聞こえる。俺自身も逃げたいと思うが少女が掴んだ手が離れない。

恐怖の中、どうすればいいのかを考えていた時・・・声が聞こえたと同時に少女は恐ろしい悲鳴を上げて炎に包まれた。

それは貴一が手に持っていた火炎瓶を、少女に向けて投げたのが命中したと言うことをしばらくして気づいた。

少女は体を炎によって焼かれながら、一度離れた俺の手を掴もうとゆつくりと近付いてくる。

『1人・・・は・・・嫌・・・お父・・・ん・・・母さ・・・』

「陽、離れろ！！もう一個・・・」

貴一が火炎瓶を手取るのを見て、俺は炎に包まれる少女を抱き締めていた・・・。

炎は俺の服と頬・手を焼くが、俺は少女を抱き締めた手を離さなかった。

自分でも何をしてるのか解らない・・・けれど離しちゃいけないと思っただ。

「大丈夫、1人じゃない・・・光を見て・・・皆、待ってるから」

俺が空の方を見上げると、雲間から少し覗いていた太陽の光が顔を上げた少女の顔を照らす。

そうすると何故か少女から炎が消え、さっきまで死人だった姿が普通の少女の姿に変化した。そして街を覆っていた厚い雲間から微かな光がカーテンの様に挿し込みはじめると、少女はにこっと微笑み光に吸い込まれるように消えていった。その時、少女が昇る光の向

こうに、同じ様な光が2つ見えたのは俺の見間違いだろうか・・・。

「陽！大丈夫か！？」

血相を変えて走ってくる貴一に、大丈夫だと告げながら自分の体を見たが、焼けたはずの箇所はうっすらと焼けたアザが残ってるだけでさっき受けた状況とは違った。

「今のって・・・幽霊？」

「違うよ、あれは【落魄^{らくはく}】あの件で街中に彷徨^{ろうはく}ってて・・・」

「落魄・・・」

「でも落魄は生きてる人間を闇に連れ込む、今度からあんな事するなよ？」
「ったく、何であんな事したんだよ・・・」

貴一は呆れた様に言ってくるが、俺自身も何故あんな事をしたのかは解らない・・・。ただ・・・。

「あの子が泣いてて・・・ひどく可哀想に見えたんだ」

「はぁ？今回はうまくいったから良かったけどさ」

貴一はぶつぶつ言いながら瓦礫の中を歩いていく、その後ろを付いて行きながらさっきの落魄が気になった。

落魄は行き場の無い浮遊する魂の結晶で、生きている人間を惑わしそちらの世界へと引きずりこむ存在。

そう説明を聞けば近付かない方がいいが、あの少女みたいな落魄がいるなら・・・俺は気になった。

「何だぁ・・・こんな所にも隠れてたのか」

「！！」

いつの間にか自分たちの近くの瓦礫の上にニヤけた男が立っていた。

「死ね！」

「わっ！？何だあいつ」

銃の引金を抵抗も無しに弾き、撃ちまくる。近くのビルに逃げ込ん

だものの武器も持ってなくどうすることもできない。

「ハハハッ!!!……ぎゃあ!!!」

男の悲鳴にそっと顔を出し様子を伺って見ると、さっきの男は瓦礫の上から落ち倒れていた。そして男がいた瓦礫の上には獣が一匹・ライオンか虎の様な姿をした……。

「^{ビースト}獣だ!!!陽、隠れろ!!!」

けれどその獣はじっと俺を見つめると、何もしないまま背を向けて瓦礫の中に消えていった。

「獣が人を襲わない何て……珍しいな……」

それから何とか仲間達と合流して、急いでアジトに向かう中、貴一に色々と聞いた。

「この世界で注意するのは、落魄、獣、そして敵の人間、大きく分けたらこの3つだな……さっきの獣は動物の姿だったけど、人に似たのとか色々いる……落魄は大体生前の姿だから人の姿が多いかな」

落魄……崩壊した時に亡くなった人が彷徨い、生きている人間を惑わす。

獣……獣などさまざまな姿をし、欲のまま人を食い殺すが例外はいる。

敵……色々なグループに別れているため……縄張り争い?

「ほんと、崩壊する前とは全然違うよ……水も電気も食料も足りないしさ……」

まったく変わってしまった東京……俺はただ驚くばかりだ。

「さっ着いたぞ」

地下道をずっと歩き通しだからここが何処かも解らなかったが、着いたアジトはやはり地下で、何処かのデパートの地下街の様だ。

「須賀さん!コイツは入れているんですか?」

「ああ、だが悪いが休むより先にこっちに来てくれ」

「俺も行こうか？」

「いや、大丈夫だって」

貴一が少し心配顔で申し出てくれたが、それを断り、銃を持った男と一室に向かう。

「まあそこへ座ってくれ、さて疲れてるだろうから本題に入る・・君はこの間、今さっき目覚めたばかりだと言っていたが本当か？」

「はい」

「そうか・・君が嘘を言っていると決めつけてはないが、簡単に信じるとも言えない、状況が状況だけに・・他者を簡単に信じる訳にはいかないんだすまないな」

「いえ・・どうしてこんな事になったか・・」

「それは我々にも解らない、何かを知っているとすれば奴ら位かもな」

「奴ら？」

「崩壊後、この東京は2つの勢力が力を持つようになった、神徒しんとと鬼乱きらんと呼ばれるグループだ、君も気を付けた方がいい・・奴らはここで生きていく上では必ず知る時がくる・・まあ今日はかなりの移動だったから休んでくれていい」

「陽、大丈夫だった？」

「ああちよつと話したただだよ」

「そっか・・陽はもうここにいるつもりなんだろう？」

実際東京がどうなってるのか全然解らないし、崩壊した街を見ても現実感を感じる事が出来ない・・。

何でこんな事に・・って何回言ってたんだか・・。

でも、何かが起こり、これから大きな何かが起こる予感だけはある。それがもやもやと気味悪い。

「神無君・・あなたも生きてたの？」

聞きなれた声が聞こえ振り向くと、黒髪で少しつり目の女が立って

いた。

「恭子!？」

柴崎恭子は元クラスメートで、学校では独りでいる事が多くいつも本を読んでいた生徒だ。

「最近目覚めたって噂になってるのあなたね？素晴らしい世界でしょ？これこそ私が望んでた世界なもの・・・お互い生き残れたらいいわね」

妖しい笑みのまま呼び止めるまもなく恭子は去っていった。

「柴崎はいつの間にかここに来てただけど・・・人が変わったみたいだろ？理想郷がどうか言ってるし・・・前は静かになってより暗い感じてそれは変わらないか」

「・・・」

「ほらじつとして、大丈夫だからね？」

隅の方で優しい声が聞こえる。

「椿つばきさんだよ、目覚めた人の中には超能力みたいなものを持つ人がいるんだ・・・あいにく俺は持ってないけど・・・」

椿と言う女は、傷を負い横たわる人に声をかけなが傷がある足に手を当てている。柔らかな光が椿の手から放たれると傷口が少しずつ塞がっていった。

「敵だ!!」

一瞬にして騒がしくなる中、武器を持って外へ向かう人の中に恭子がいた。

「恭子!？」

「陽!危ないって!!」

遅れながらも地上へ出た頃にはすでに戦闘は始まり、あっちこっちで声と銃声音響く。

「おいおい兄ちゃん、よそ見してていいのか？」

「それはあなたの方でしょ？」

銃声がして振り向くと、俺に銃口を向けていたらしい男は血を流しすでに息が無く倒れていた。そしてその傍らに立っているのが・・・。

「恭子・・・」

「戦わないの？それでもいいけど、戦わない弱い奴は皆死んじゃうだけよ？」

恭子は人を1人殺したと言うのに、それをむしろ楽しんでしているように笑みを浮かべている。

「お前人を殺したんだぞ!？」

「ふふふ・・・でもそうしなきゃ、あなたが死んでたわよ？せつかく選ばれたのに・・・」

「選ばれた？」

それがどういう意味か解らなかった・・・けれど確かに恭子が言っていた通り恭子が倒さなかったら俺が・・・死んでたかもしれないけど・・・。

恭子は何も言えない俺から視線を外し、再び戦闘が行われている方へ走っていった。

「頭・・・痛ッ・・・」

痛みによろけながら街を見ると、あっちこっちにいつの間にか死体が転がっている。空気はよどみ、空は昼間だと言うのに暗い・・・死臭が充満する東京の街・・・。

誰が思っただろう・・・。

誰が予想出来ただろう・・・。

ここが本当に東京だったのか、世界は壊れてしまったのか・・・。

>>>Next

記憶

痛みが増す頭痛で視界が薄れて・・・俺はその場に倒れてしまった。

「なあなあ聞いてくれよ!!」

かなりのご機嫌でそう言うのが貴一と芳川雅人の2人。

よしかわまさひで
芳川雅人は、副部長で・・・まあパソコンとかゲームとかの属に言うオタク。

「ウルセーって・・・」

日本を片手に持って、茶髪にネクタイをだらしくゆるめ、ソファに寝そべっているのが林田啓二。はやしだけいじ

「ねえ何の話?」

少し派手めメイクに短いスカートの松野世良はいつもの軽いトーンで話に混じってくる。まつのせら

そして俺を含めたこの5人がパソコン部だった。っと言っても俺の場合、部長の貴一に人数合わせで無理やり入部させられたんだけど。

「やっと手に入れたんだよー!!じゃーん!!」

貴一が手に持っていたのは、真っ黒な箱に入ったゲームソフト。タイトルも何も書いてない箱に貴一と芳川以外の俺たちは首を傾げる。

前から貴一が欲しがっていたゲームがあったのは知ってる。耳だこが出来るくらい話を聞かされたからだが・・・。

けど、そのゲームは曰く付きで、どこかのプログラマーが造ったらしく・・・公には売り出していない。なのに最近このゲームが密かに人気を持っている。

「それって例のでしょ??ほんとに存在してたんだあ・・・」

「ってか、ほんとに面白いのかよ?」

俺はそんなにゲームをする方じゃないし、あまり興味が無い。

そんな俺たちの反応を見て貴一と芳川は、じゃあ見てろよ！つとソフトをパソコンに入れてしまおう。

「あっ入れちゃった・・・いいの？」

「説明書とか・・・って入ってないし・・・おい、貴一」文句を言う林田は無視なのか、2人は画面をじつと凝視する。

「これは何人でもプレー出来るんだよ」

次々に起動ページが開き、ログインページへと切り替わっていく。

芳川の名を最初に入れ、貴一、世良の3人を次に記入する。

「2人はどうする？」

俺は少しはどんなのか気にはなったが、自分がプレーするほどの興味は無く。

「俺はパス」

「俺もパス、先帰るわ」

林田はダルそうにそう言って部屋から出ていった。

結局3人がプレーする事となり、俺は取り敢えずどんなのかだけ見て帰るかなあっと部屋に残った。

「部長？パスワードって出てるよ？」

「ああ、これで大丈夫」

貴一はすぐにキーボードで打ち込む。そうするとすぐに、画面は真っ黒になり次に白い文字が下から順に上ってくる。

『 ヨウコソ

君達ヲ歓迎スル

最初ニ・・・

G a m e ノ キ ャ ン セ ル ハ 出 来 ナ イ ・ ・

ソ シ テ ・ ・ ・

G a m e ハ、勝者ガ決マルマデ続ケラレル ・ ・

君達ハ選バレタプレイヤーダ ・ ・

サア創メルガイイ ・ ・

全テハココカラ始マルノダカラ ・ ・ ・

』

「何これ？気持ち悪う・・・」

文字が出ると、黒い水の水面が動くように画面が波打つ。しばらくすると、画面はクリアになりゲームが始まったが・・・。

「現代のRPG？」

プレーするキャラは自分で選ぶのでは無く、どうやらログインの際に自動的に登録されているようで、貴一達はもちろん学生で性別も決まっていた。しかも・・・そのキャラは自分達と似ていて・・・。

「何か・・・気持ち悪くない？」

「そうか？面白そうじゃん」

「陽、今日はもう帰ろ？芳川君、また進み具合教えてね？じゃっ明日」

世良は気味悪がって半ば無理やりに俺を連れて部屋を出る。

「陽は・・・あのGameどう思う？」

「俺はあんまり詳しくないからなあ・・・」

「そっか・・・あのね、何となくなんだけど」

世良は見た目派手で言葉も軽いが、人より感受性が強いいい女友達だ。

「あれ普通じゃ無い気がするの・・・やばいものかも・・・」

その時、俺はあまりその言葉を信じていなかった・・・けれど世良の表情はどこかいつもと違うようなっと思う程度だった。

「・・・お腹空いてない？一緒に何か食べに行こ？」

「ああ」

「やった？もちろん陽のおごりでね」

「えっ？・・・ったく」

「えへへ、ご馳走さま？」世良のいつもの様子にいつの間にかゲームの事を忘れていた。

何気ないいつもの日常の記憶・・・。

なのに一瞬で視界が変わり、真っ暗な脳裏の中断片的に映像が見え

る。

「・・・助けて・・・」

「嫌!! 来ないで・・・もうやだ!!」

「このGame・・・は・・・」

「どうして・・・こんな事に・・・」

「・・・陽・・・お願い・・・私を・・・」

「ッ・・・」

どれ位気を失っていたのだろう・・・外は真っ暗なのに気づく。

まだガンガンと痛む頭を押さえながら周囲を伺う。

「倒れて・・・たのか・・・」

そうだ・・・目覚めてから過去の事を忘れていた・・・もう少し思い出そうとしたがさっきの記憶以外、思い出そうとしても何故か思いだせなかった。頭の靄がかかっているようで目覚めてからスッキリしない。

「あら、こんな所に人がいるなんて」

月明かりの下に学生服を着た女が瓦礫の上に座っていた。

「怪我? それじゃこちらに来てみて下さい」

女は優しく微笑みながら招く。

「この湧き水は治癒力があるんですよ」

促されるまま、その湧き水に触れてみると確かに擦り傷などはほとんど治っていく。

「そう言えば自己紹介がまだでしたね、私は神宮寺祈じんぐうじいのりと言います・・・もしよろしければこうして出会ったのも何かの縁・・・あなたの名前も教えてくれませんか?」

神宮寺祈と名乗った女は、にっこりと微笑む。黒い髪を肩まで伸ばし、黒色のセラー服に紺色のリボンを結んだ学生服を着ている

「俺は・・・神無陽」

「神無さん？ですか、あなたのグループは？」

「・・・いや・・・特には・・・」

「・・・なら私と一緒に来ませんか？」

「は？」

「私は神徒に属しています、神を思う心がある方なら誰でも歓迎ですよ」

神徒って貴一達が言ってた大きなグループの一つだな・・・。

貴一に聞いた時はどんな奴らかと思ったけど・・・。

「答えを焦らしてしまいましたか・・・？すみません・・・」

「いや・・・そう言うわけじゃ」

申し訳そうな表情をしたが、次の瞬間少しだけ表情が変わった。

「・・・少し周りが騒がしくなってきましたね・・・私はここを離れます・・・ではまた機会があれば」

「はあ」

「面倒ごとに巻き込まれなくなったら、早めにあなたも離れた方がいいですよ」

神宮寺がそう言うと同時に、上の方で瓦礫が崩れる音がした。

「!？」

「そこの動くな!!」

崩れた瓦礫を爆発かなんかで微塵になったと思うと、銃を持った者達に囲まれた・・・。

「こんな所で1人で何をしている？」

さっきまでいた神宮寺の姿はすでに無く、自分1人が呆然とそこに立っていた。

銃を構えている人から見れば確かにおかしな光景・・・。

「何をしていると聞いているんだ!!」

返答に困っていると、身体検査をされ何処かに連れて行かれることになった。やはり崩れかけたビルの中を通り、地下道を通る。

東京にこれだけの地下道があるなんて・・・以前なら知ること無かっただろう。

「ここに入ってる」

と言われ、入らされた所は刑務所の牢屋の様な場所だった。ひんやりとした空気と、かび臭い臭いが漂っている・・・。

「まさか・・牢屋に入る日が来るなんてな・・・」

こんな状況だけど、頭の中を整理するにはいい時間かもしれない。
・調べる事は沢山あるけど・・貴一が言ってたゲームソフトも引っ掛かる・・・。

「はぁ・・・」

目覚めてから今日で・・まだ7日位だもんなぁ・・・。こうなる前は、ほんと退屈な様な毎日で、朝起きて、学校行って、貴一達と部活して・・帰って寝る・・・。今考えるとどれだけそれが良かったか・・・。

「・・・あの・・・すいません・・・」

体を揺さぶられる振動で気づくと、どうやらいつの間にか眠っていた。そして周りには数人の男と自分より少し幼い少年がいた。

「誰？」

「こことは違う場所からここに移されてたんです・・・」

「君もあいつらに捕まって？」

後ろに座った男達に睨まれるが、横に座った少年は落ち込んだ表情で頷く。

「あのさ・・・ここって何か知ってるか？」

「ここは鬼乱派の辺境地です・・・」

「鬼乱・・・」

「おいおい、この兄ちゃん何にも知らねえのか？」

話を聞いていた男が口を挟んでくる。

「勢力の辺境地って言っても、鬼乱に捕まったら終わりだ・・・」

「終わり？」

「兄ちゃんも俺も、良くて死ぬまで放置されるか、悪くて・・・奴ら

に殺られるかだな」

馬鹿にした様な口調で話す男にも、恐怖の影が見える。

「あの・・・その制服って桜咲高校ですか・・・？」

「そうだけど」

「やっぱり・・・あの松野・・・松野世良って知っていますか？」

「世良？知ってるよ、同じパソ部だったし・・・君こそ何で世良を？」

「あっ・・・僕は松野春まつのはると言います、世良は姉なんです」

驚いた。こんな状況で知り合いに合うとは思わなかったし、世良に兄弟がいたのも初耳だ。

「世良に弟がいたなんて知らなかったな・・・」

松野春と名乗った少年は、確かによく見れば世良と目元などは似ているかな？っと思うが、世良とは違って真面目そうなタイプだ。

「姉さんを・・・見ていませんか？」

見ていないと告げると春はしゅんとうなだれる。

「そうですか・・・僕も高校の方へは行ってみたんですが・・・」

「行っちゃって、どうなった？」

「え・・・学校周辺は見てみたんですけど校舎の方は崩れている部分が多くて中には入れなかったんです・・・」

「そっか・・・」

貴一も学校の事を言っていたし、入れなくても一度行ってみようと思った

「でも鬼乱に捕まるなんて・・・」

春がますます落ち込んでしまいだうしたもんかと考えていると、大きな音が鳴り響いた。

それは巨大な鉄扉が開くような音だった・・・。

>>>Next

赤い火

大きな鉄錠の音がしたと思うと、武装した人間が数名牢屋に近付いてきた。

「お前ら出ろ」

乱暴に牢屋から引っ張りだされ、二列に足枷を付けて歩かされる。

「喰われる・・・」

誰かがそう呟く・・・周りを見ると皆さっきまでの表情では無く、春さえも蒼白になっている。

しばらく歩かされるままに進んでいくと、廊下の先に光が見えた。

「なっ!？」

最初は外へ出されるのかと思ったが進んでいく内にその光に色があることに気付く。

こんな異様な光は見たことがなかった。目前にそびえ立つビルに巻き付くかのように赤い光が妖しく光る。

「こんな所にも出来てたなんて・・・」

呆然とした表情でビルを見上げる春。

「あの赤い光は・・・生命エネルギーの塊・・・生き物にはさまざまな生命エネルギーがあり、もっとも力を持つと言われるのがあの赤、あれは生命の負を表しているんです・・・」

「負?」

「・・・恐怖や怒り、憎しみなどを心に秘めたまま亡くなった生命の魂は赤い色になると・・・」

「何を話している!？」

武装した男が1人近付いてくるのに思わず身構えていると、自分達の横は通り過ぎ後ろにいたフード姿の人物に近付く。

「お前怪しいな・・・フードを取れ!」

「・・・そんな事より、早く連れて行った方がいいんじゃない?」
フード姿の人物がビルの方を指差すと、武装した男はちっとフード

目がけて唾を吐き急いで元の位置につき歩き始める。

周りの人間とは違う雰囲気を持つフード姿の人物が気になったが話し掛けられる状況でもなく、俺は時折後ろに意識を向けながら歩いた。

そして俺達は赤く光ビルに入ると、再び牢屋に閉じ込められた・・・。

「鬼乱は負のエネルギーを喰い、力にすると言われています・・・だから僕達も・・・たぶん」

ここが鬼乱・・・思っていたよりも不気味な所だな、っが一番の印象。

春達の様子を見れば鬼乱が恐ろしいと言うことを知ることはできるが、まだ俺はその真意は解らなかった。

人の負のエネルギーなんて本当なのか？人が人を喰うなんて想像できない。

けれど今は人が人を簡単に殺すということだけは嫌でも信じなきゃならないのは解っている・・・。

皆はシーンと静まり返り、何かを呟いている者もあれば、泣き崩れる者、諦めて力なく座り込んでる者と様々だ。その中でフード姿の人物を見付けることができた。奴も壁によりかかるように座っているがやはり周囲の者とは雰囲気が違う。

気になりながらも、自分の横で丸くなり眠っている春を見ているといつの間にか俺も眠りについていた・・・。

聞き慣れた着信音が鳴り響き、慌てて携帯を上着のポケットから取り出し、電話相手を確認してから通話ボタンを押す。

「世良？」

電話の向こうでは酔っているのか、訳の解らない事を言う世良から何とか居場所を聞き出すと真っ暗になった夜の道を走る。

「ちょっと触らないでっ！！」

夜でも電飾で昼の様に明るい繁華街で声が聞こえると、世良は数人

の男達に囲まれていた。

「可愛いのにー一緒に遊びにいこ」

「やだって！もう、離せよ！」

その状況を見てまたかっとな小さく溜息をつき、俺は近くにあったゴミ袋を男の1人に投げつけた。隙が出来た間に、世良の手を引っ張る。

「行くぞ！」

後ろから男達の叫び声が聞こえたが、繁華街を抜け学校の近くの公園まで走る。酔っ払いの足じゃここまで走れば大丈夫だろう。

「ちよっ・・陽・・もうダメー」

そう言って座り込む世良をベンチまで誘導し、自分も隣に腰を下ろす。

「えへへ、ごめんーまた陽に助けてもらっちゃった」

「・・ったく、これで何回目だよ・・それに酒弱いんだから飲むな」

「・・ごめん」

真っ赤な顔の世良は俯いて小さく謝る。

「はあ・・ほら送るから」

「やだ、今日は帰りたくない・・」

「親父さんと喧嘩したのか？」

世良には親父さんしかないなので家庭は大変らしかったが、最近再婚話が上がった事によって世良がますます不良の真似事をしていた。

世良は派手な外見だが、真面目で不器用な生活。俺も部活とかで付き合い初めてそれを知った。まあ手間のかかる妹みたいな感じだ。俺自身も何度か世良を送って行くことで、親父さんと少し話すようになり知った事だったが・・。

「ねえー遊びに行こう、カラオケでもいいし・・あんな家・・帰りたくない・・もん・・」

そう言いながら世良は酔いが回ったのか、眠ってしまい・・俺は世

良をおんぶして帰路につく。

「・・・酔って暴れるくらいなら親父さんに言えって・・・心配してんだがら・・・」

「あの・・・」

体を揺り起こされ目を覚ますと、春が心配そうに覗き込んでいた。

「あれ・・・？」

周りを見わたすと人が減っている様な・・・。

「今朝、何人が連れて行かれたんです・・・あの」

「?・・・春ってあのしか言わないよな？」

「え・・・だって僕あなたの名前知らないから・・・」

「・・・あっ・・・悪い、世良と同じクラスでパソ部の神無陽だ」

「神無・・・陽?・・・あの陽さんですか!？」

「あの?・・・そうだけど・・・」

「姉さんがよく話してたんですよ、陽さんの事・・・」

「・・・世良が？」

世良が俺の事を話してるのは以外だった。世良はあまり自分の事を人に話さない方だったから。

その時また大きな鉄錠の音がして、牢にいた数人を連れて行った。連れていかれる男達は、皆恐怖と絶望の表情で口数も少ないままだった。

それが何度かあると、牢に残ったのは俺と春、フードの人物の6人。

「姉さんが、陽さんの事を話している時はすごく楽しそうで・・・だから陽さんだったら姉さんを・・・止められるかもって・・・」

「世良を・・・止める？」

春にそう質問をすると同時に、再び鉄錠が大きな音を響かせる。

「おい、出ろ」

「いっ・・・嫌だ!!俺は!!」

隅の方で今まで隠れていた、痩せ細った男が悲鳴をあげ牢が開いた

隙に飛び出る。

二発の銃声は痩せ細った男の頭部に命中し、男は大量の血を流し倒れた。

人を1人殺した銃を持つ男に表情は無い・・・。

東京がこうなってしまうてから、こういう人を多く見る・・・。

けれど、それは前の東京でもさほど変わりが無かったと感じる事もある・・・。

「そいつみたいに死にたくなかったら、さっさと来い」

残った者は素直に男達に着いて歩く。

「まあどっちみち死ぬんだけどな」

そう聞こえる様に男達は面白そうに話すのを聞きながら、しばらく着いていくとコンクリート剥き出しのビルに赤い光が霧の様に漂う。

「どれだけ死んだんだろう・・・」

赤い光は人の命の・・・炎・・・。

そして辿り着いた場所には水を張った大きな巨大浴槽の様なものがあり、水のかわりに赤い血と、端には数体の屍が転がっている。

「さあここらで待ってろ」

男達がニヤニヤしながらその大きな広間から離れると、入口の扉が重い音を立てながら閉じる。

しばらく不気味な静けさが流れ、そして再び扉が開く。

「げっ残り5人しかいねえの？ったく、つまんねえな」

扉から入って来たのは、迷彩柄のズボンとTシャツを着た男が1人。

「まあ仕方ないわな・・・じゃっそろそろ喰わしてやんねえつと」

男が面白そうに言うと、肉体が光り段々と獣の姿に変わっていく・・・。

「なっ!？」

みるみる変わった男の姿は牙を剥き、こっちらを睨む。

「うわああ!!」

それを見た他の人が走り出すと、獣化した男が人とは違う速さで逃げ出した人達に喰らいつく。

「ギャアア!!」

あつという間に、春とフード姿の者と三人になってしまった。

次は自分達に視線を動かす・・・。

「春、俺の後ろにいろよ」

「は・・・はい」

じりじりと寄って来る獣に後ずさりをしていると、フード姿の人物が前に立ち。

「じっとして」

動くフードの人物にめがけて、獣の男が襲いかかるが・・・。

フードから腕を出すとうっすらと文字のような印が浮かび上がり光を放つと、目の前には金色の獣が現れた。

「金色の獣？」

「あれは・・・霊獣！」

金色の毛並みを持つ獣は、狐の様な姿で二本の尻尾を持っている。

「グギャアアッア!!」

金色の獣によって首筋を噛まれ、ブシュッと辺りに血飛沫が飛ぶ。

獣の男は絶叫し倒れて血の池に落ちて上がってくることは無かった。

再び扉が開き、銃を持った武装した者達が入ってきた。

「・・・大丈夫、その人達は一緒に捕まってたんだ」

俺と春は銃を向けられたが、フード姿の人物がそう言うのと銃を下ろす。

「あんた達は一体？」

「一先ず脱出だ・・・援軍が来るとやっかいだからな」

「解りました、退却するぞ！」

「あなた達も行く所が無いのだったら、一緒に・・・」

そう言ったフードの人物の声は、思っているよりも高く・・・。

子供？・・・それとも女か？

「うわぁ!!」

後ろにいたはずの春は、いつの間にか死んだと思われていた獣の男に掴まれていた。

「生きていたのか!？」

『そう簡単に・・・逃がすわけに・・・は、いかねえ!!・・・』

全身血だらけに、荒い呼吸を繰り返しながらそう言う獣の男の太い声が響く。

『・・・お前ら・・・全員ここで死ぬ・・・んだ!!』

春の首筋に牙を立てようとした獣の男。

「夜十!!」

フードの人物によって狐の霊獣が風のようなスピードでむかうが、それよりも早い獣の動きに・・・。

「春!!」

>>>Next

空

『これは餞別だ・・・お前の還る世界には必要だろう・・・』

脳裏にあの時の声が響く・・・。

一瞬、手の甲が熱くなり、さっき聞こえた声とは違う別の声が聞こえたと思うと手の甲が黒い光を放つ。

『きゅ?』

「・・・・・・・・」

光と共に現れたのは、黒くて丸い・・・。

「まっくら○○すけ?」

いや違うだろうと周りの突っ込みは置いて・・・。

それは黒いまりもの様な姿で、大きな目が二つ。ふわふわと宙に浮いている。

『きゅ!』

もう一度それが声を出すと、口から黒い光の玉が出て、すごい早さで獣へ当たると一瞬で蒸発したかのように消えてしまった。

「「な!」」

春には獣からのかすり傷程度の怪我だけで済んだが・・・。

『きゅ』

何事も無かったかの様に、嬉しそうに俺の頭の上に乗る黒い物体を皆見つめる。手で追い払ってみるものの戻ってくるし、さっきの術はすごいが・・・取り敢えず自分たちに害は無さそうな感じだ。

「一先ず、ここを離れるぞ」

「はっ!」

わけもわからない状況だがここにいるとまた牢屋行きだ・・・俺と春は立ち上がりフード姿の者達についてその場を離れることにした。

それからまた地下道をどれ位移動したか、今は使われていない地下鉄の中に入っていくといくつもの大きな穴が開いている。

「おい、よそ見していると迷うぞ」

真っ暗な穴の中で道しるべとなるのは、数本手に持っているタイマツの光だけ。

穴は思っていたより複雑で迷路の様だ。

「異常ないか？」

「はい・・・こいつらは・・・」

「・・・さあな」

銃を持った門番達の間を通り抜けると鉄のボロイ扉が見える。扉の向こうは、地下の街つと言った感じの小さな扉がいくつかあり、人もの姿も見える。

「では自分達は持ち場に戻ります」

「ああ、助かったよ・・・追っ手がいないか確認も任せる」

「はっ」

フード姿と自分たちを残し先程まで一緒にいた人たちは各々の場所へ散っていく。

「・・・お前達はこっちだ」

フード姿の人物に言われ、俺と春は後を付いていくが周りの視線はどこか冷たい。でもひとつ嬉しかったのは武器を持ってない人もいたこと。些細なことだが、久しぶりにほっとする。

「楽にしてくれ」

一室に通された俺達はその場に腰を下ろす。

「さて、お前達は何処から来た？何故あいつらに捕まっていた？」

「僕は、以前は神徒にいました・・・今は何処にも属していません・姉を探してて」

春はおどおどしながらも説明をすると、椅子に座ったフード姿の人物は俺に視線を向ける。

「俺はついこの間目覚めて、たまたま知り合いに助けられたんだがはぐれてしまっ」

「この間？」

「確か1週間前くらいに気が付いて、そしたら街がめちゃくちゃ壊れてて・・・」

今までにも何度か話した内容だが、嘘を言うつもりもないし、ただ俺自身の事も、世界の事も今は多くの情報が欲しい・・・。

「そう・・・けどそんな例は聞いた事がない」

坦々と話を聞いてきた男が俺に銃を向けると、フード姿の人物が銃口に手を当てる。

「庇うのか？」

「嘘を言っているようには思えない、それに・・・」

「まあいい、見張りは付けさせてもらおう・・・っが、あとはお前に任せる」

そう言う男は立ち去って行った。

「悪いがお前たちを信用したわけじゃない、少しでも怪しい行動をすれば命はないと思え」

そう厳しい口調で話、おもむろに頭のフードをとると現われたのは自分と同じ位の女だった。

「私は橘ありす（たちばなありあす）、お前達の名前は？」

「僕は松野春です」

「俺は、神無・・・陽」

「春に陽か、私の事は好きに呼んでくれていい」

橘ありすは、カールした金髪の髪を2つに結んでいる。意志の強そうな目が印象的だ。

「あの、あなたは？それにここは・・・」

「ここは中立派」

「えっと中立派は、神徒や鬼乱じゃないグループで・・・少数グループに分かれていて、個々に行動してるんです」

「じゃあこの人は何処にも属さないってやつか」

「実際はその2つの勢力に反発したり、はみ出てる者の集まりみたいなものですけど」

こそつと教えてくれた春の言葉に橘が答える。

「まああながち間違っではないけど、あまり聞こえるような場所で言う話じゃないな・・・それにしてもその霊獣は見たこと無い姿だ」

2人の目線は、俺の制服の胸のポケットで眠っている黒い物体に集中する。

『きゅ?』

黒い物体はそれを感じてか、ふわふわと浮きながらポケットから出て俺の頭の上に座る。

「これって霊獣なんですかね?」

「さあこんなもの私もみたことないが、さっきの力を見る限り霊獣に近いんじゃないかと思う」

『きゅ?』

「神無さん、名前どうします?」

「名前?」

「霊獣は主人を選ぶ、選ばれた人間が名を付けることで契約したことになるんです」

契約した霊獣は主人の命に服従、もちろん得体の知れない生物だけに例外も中にはいるらしいが・・・

「名前か、お前なんて名前がいい?」

『きゅー?』

「つと言っても喋れないか・・・」

悩んでいる俺に、春が提案する。

「来由らいゆってどうですか?」

「来由?」

「はい、事のはじまりって言う意味です」

「そうだなーお前来由でいいか?」

『きゅ』

「気に入ったみたいだな、それじゃお前の名はこれから来由な」

『きゅー』

来由って名前、ぴったりだと思った・・・今のこの状況に・・・。
俺は眠りについた春を横に、無機質な鉄骨の天井を見つめながら考えていた。

中立派と言っても、まだ得体の知れない連中だ。鬼乱なんかより人間らしいけどどこか・・・何かに怯えてる・・・そんな印象を持つ人達。

いつかどれかのグループを選ばなくてはならないのだろうか・・・。

貴一もはぐれたままだし・・・。

貴一がいるって事は、世良もこっちに来てるのか？

そんな尽きる事のない事を考えながら、俺は眠りに付いた。

「世良」

学校の屋上は通常立ち入り禁止になっていて、外からしか開かない鍵のため教師と生徒会長しか鍵を持っていないのだが・・・俺達パソコン部は貴一が何かの見返りに会長に貰ったって言ってココの鍵を持っていた。

まあ見返りって言うっても、脅しに似たようなものだと思うけど・・・。

それで俺達部員は合鍵を作って自由に出入りできるようになった。

って言うっても、ココに来るのは主に俺と世良、時に林田が授業をさぼって昼寝しにくる程度。

「・・・陽」

特に世良はココの常連、見当たらないなっと思えば大抵学校に来て
いる時はココにいる。

「またこんな所にいたのか？昼飯は？」

屋上の柵にもたれ、空や街を見ていた世良は、俺の言葉に振り向く。

「食べてない」

「っと思った、ほれ、これやる」

「やったーありがと」

軽く投げたパンとジュースを受け取る世良。

「最近顔色悪くないか？ちゃんと食えよ」

「えー心配してくれるの？あの神無陽が！？」

「あのって何だ、あのって」

「知らないの？陽はいつも無愛想って言われてるよ」

「はあ？」

「まあよく言えばクールってやつ？あはは」

「はいはい、無愛想で悪かったな」

「悪く無いよ世良にはこんなに優しいし？・・・ぷっ！」

「お前な、自分で言って笑うなよ」

世良はしばらく楽しそうに笑ってから、俺の横に三角座りをして下を向いたまま呟く。

「・・・ほんとの陽は優しいのに、皆無愛想なんて解ってないね」

口調はさっきと同じだが、うつむいた横顔の表情は違ってて・・・。

「別に解ってくれる奴が解ってくれたらそれでいいじゃん」

「あはは、そだね・・・陽らしい」

世良はいつも派手な格好をしている、喋り方や行動もいつも元気そうだけど、ココ（屋上）で見る世良はどこか違う。

そういえば俺が世良と初めて喋ったのもここだったなとぼんやり思い出す。

「ねっ・・・あのね」

「ん？」

「もしさ、翼があったらさ何処行ってみたい？」

「翼なあーまあ飛び回ってはみたいな」

唐突な質問だけど、俺は思い浮かんだまま言葉にする。

「私は誰も知らない、まだゼーんぜん知られてない場所に行ってみたい」

「知られてない所かーいいかもな」

「でしょ！」

世良は俺の答えに嬉しそうに頷き、仰向けになって空を見上げる。
流れる雲を指先でなぞったり。

「陽、ありがと・・・」

人間関係が苦手だと前に言っていた世良、最近は少しパソコン部に
溶け込んできたと思う・・・だけどふとした時に気づくと姿はない。
いつも何処かへ行きたいと言ってた世良・・・今は何処にいるんだ
ろう。

お前もここにいるのか？

>>>Next

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9305n/>

Game

2010年10月9日19時05分発行